『中外日報』平成８年１月３日付（25403号）47面

復興への希望を胸にたとえ道は険しくとも

地震の悲しみ乗り越えて

　私の通学している御影小学校でも６人の友達が亡くなりました。私のクラスの山下君は生さ埋めになりかけましたが、それをお父さんとお母さんが必死で逃がしてくれたそうです。でも、そのためにお父さんとお母さんは家の下敷きになって亡くなりました。
　その話を聞いて、私は山下君がかわいそうでたまりませんでした。この山下君のように助かっても大事な大事な家族を失ったり、家全壊して仕方なく神戸を離れてゆかなければならない友達など悲しいことが一杯でした。
　たくさんの家がつぶれ、たくさんの人が亡くなって、これから神戸の町はどうなってゆくのかなと思います。私も避難生活をしていました。まだ避難している人もいます。地震の悲しみや苦しみを乗り越えて、神戸は復興に頑張って早く安心して住める街に戻って欲しいです。
　両開されたお寺の日曜学校の話の中で「形あるものは壊れる。壊れないものこそ仏様、阿弥陀様のみ教え、心」ということを聞きました。こんな時だからこそどんなことになっても壊れない形の生き方を、これからも学び頑張っていきたいと思います。
　（これは、昨年３月24日に浄土真宗本願寺派の本山本願寺で営まれた「阪神・淡路大震災総追悼法要」で、御影小学校５年生の大川恵利佳さんが被災者代表として述べた言葉の一節です）

　震災後、神戸で最初に竣工した建物となった浄土真宗本願寺派の神戸別院。震災の影響を受けつつも、昨年９月に無事に竣工を迎え見事に蘇った「平成のモダン寺」は、“不死鳥”神戸、そして、本願寺派兵庫教区の復興へのシンボル

［写真は省略］

(c) 1996中外日報社(デジタル化：神戸大学附属図書館)